

第 62 回日本産科婦人科学会・学術講演会

若手医師企画

21 世紀を担う産婦人科活性化プロジェクト ～ずっと続けていくために～

総 論

¹⁾東邦大学²⁾慶應義塾大学³⁾東京大学⁴⁾東邦大学太田 邦明¹⁾ 小野 政徳²⁾ 鶴賀 哲史³⁾ 山本 泰弘⁴⁾

産婦人科医師不足等によりわが国の産婦人科医療体制は崩壊の危機に直面しており、社会的にも大きな問題となっている。これまで日本産科婦人科学会では、産婦人科医療体制の再生に向けて様々な活動が行われる一方、国等に対し積極的な政策提言がなされてきた。また、既に当学会では医学部学生ならびに初期臨床研修医を対象としたサマースクールが開催されており、産婦人科に興味のある医学部学生ならびに初期臨床研修医の参加を募った上、全国の大学教授ならびに若手医師が最先端の産婦人科医療を紹介するとともに学術交流を行っている。

このような取り組みは産婦人科医師確保に少なからぬ成果をあげ、先の厚生労働省の調査において産婦人科医師の増加が示された¹⁾。一方で、専門医取得前の若手医師のうち男性ではおおよそ 1 割、女性ではおおよそ 2 割が産婦人科を離職すると報告されている。また、産婦人科専門医取得後 10 年では、男性医師の約 2 割、女性医師の約半数が分娩を取り扱っていないという状態が浮き彫りになっている²⁾。産婦人科医師不足を解消するためには、新規産婦人科医師増員のみならず、産婦人科からの離脱率の減少が重要であると考えられる。当初より我々は、第 2 回若手医師企画に以下の目標を掲げていた。それは産婦人科の魅力や将

来性についての提言をすること、若手産婦人科医師の現況を社会に正しく伝えること、産婦人科の魅力・展望を本気で伝えること、産婦人科医療に関し真剣に考えている者がいることを社会と産婦人科医に伝えることである。我々は幸いにも日本産科婦人科学会の若手医師海外派遣のプロジェクトに参加し、地域や大学医局の垣根を越えて若手医師間での意見交換やともに研修する機会を得ることができた。その体験から、全国の若手医師が地域や大学医局の垣根を越えて交流することで横のつながりが形成され、お互いを支え合い・刺激し合っただけでなく学び成長していくことで産婦人科からの離脱を減らすのみならず産婦人科の活性化と発展に寄与できるのではないかとこの発想に至った。そこで産婦人科の現況を正しく把握し、全ての産婦人科医が夢を持って働き続けていけるような社会を目指したいという思いからこの企画を開催した。産婦人科は医師数の減少・高齢化が進み、若手では女性医師の割合が年々増加し 30 代の 50%、20 代の 70% は女性である³⁾。一人でも多くの医師が魅力とやりがいのある産婦人科を選び、専門医取得後もずっと働き続けていけることが大切であり、現況を正しく把握・共有した上で、男女を問わず全ての産婦人科医が夢を持って目標を見失わずに働き続けていけるような社会にするに

62nd Annual Congress of the Japan Society of Obstetrics and Gynecology
第62回日本産科婦人科学会学術講演会
第2回若手医師企画シンポジウム



2010年4月25日(日)
13:00~15:00

東京国際フォーラム 第6会場 (Hall D7)
【参加自由】

主催：日本産科婦人科学会 教育委員会・若手医師企画委員会・若手企画グループ委員

【図 1a】

はどうしたらよいかを皆で一緒に考える企画にしたいと考えた(図 1a, b).

第一部のシンポジウムでは、はじめに東京大学の竹村由里が産婦人科を離脱せずずっと続けていくためにはどうすればよいかを考えるために、「産婦人科の現況」について報告した。産婦人科からの離脱率および分娩からの離脱率を減らすために、職場環境の改善、患者・社会との相互理解を図りつつ、専門医取得前後から卒後10年目前後をターゲットとした「産婦人科を離脱せずずっと続けていくための施策」が必要であると訴えた。

つづいて日本産科婦人科学会を代表して、吉村泰典理事長が「若い人たちとともに」というテーマで学会としての取り組みを紹介した。若手医師に期待することとして、専門医制度のあり方を自ら考えること、女性医師の職場への復帰を促すようなプログラムを実行すること、Basic Scienceに対する興味を持ち続けその発展に貢献することを挙げ、学会としてその先導者たらん医療人を養

第2回若手医師企画シンポジウム

◎ 本企画の背景

日本の産婦人科医療は産婦人科医師不足等により崩壊の危機に直面しており、社会的にも大きな問題となっていることは周知の通りです。一方で、専門医取得前の若手医師のうち男性でおおよそ1割、女性でおおよそ2割が産婦人科を離職すると報告されています。また、産婦人科専門医取得後10年では、男性医師の約2割、女性医師の約半数が分娩を取り扱っていないという現状です。

産婦人科医師不足を解消するためには、新規産婦人科医師の増員のみならず、産婦人科からの離脱率の減少が重要であると考えられます。

◎ 提案

我々の考える解決策は、横のつながりを作ることです。つまり、地域や大学医局の垣根を越えて、全国の若手医師が横のつながりから、お互いを支え合い・刺激し合う関係が生まれ、産婦人科からの離職を減らすことができるのではないのでしょうか。

“ずっと続けていくために”は何が必要か 一緒に答えをさがしませんか？

このシンポジウムでは広く皆さんの意見を求めています。
ぜひ会場に足を運んで参加してください。

WEB: <http://jsog.umin.ac.jp/62/wakate@kink@htm> E-mail: wakate@jsog.or.jp

プログラム

日本産科婦人科学会 吉村泰典理事長より
若手企画グループ委員より
産婦人科の現況・学会の取り組み・国内外の若手医師活動の紹介
若手企画グループ委員からの提案
若手医師企画委員会 峯岸 敬委員長より
意見交換
※会場後方に軽食をご用意しております
教育委員会 小西 郁生委員長より

若手企画グループ委員 (平成12年~平成15年卒)
潮田至央 (川崎医科大学) 浦田陽子 (東京大学) 太田邦明 (東邦大学)
小野政徳 (慶應義塾大学) 岡山健太郎 (京都大学) 竹村由里 (東京大学)
鶴賀哲史 (東京大学) 浜口大輔 (長崎大学) 古川雄一 (大分大学) 山本泰弘 (東邦大学)

【図 1b】

成していくとした。

第二部では、若手グループ委員が若手産婦人科医を対象とした取り組みを報告した。長崎大学の浜口大輔が「日産婦の取り組み」、川崎医科大学の潮田至央が「海外での取り組み」、大分大学の古川雄一が「国内各地での取り組み」をそれぞれ紹介した。それらの取り組みを参考にして、東京大学の浦田陽子が「若手グループ委員からの提案」を発表した。全国の若手医師に横のつながりができることで、若手医師同士が支え合い、刺激し合い、ともに学び成長する関係が形成され、産婦人科の活性化・発展が期待できるとし、「全国規模で、もっと多くの若手医師が交流できる機会を作る」と提言した。

謝 辞

当企画開催の場を提供して下さりました、獨協医科大学の皆様、学術集会長の稲葉憲之先生、これまで当企画開

催にあたり忙しい時間をやり繰りし会をサポートしてくだ
りいただいた教育委員会の先生方, 小西郁生先生, 峯岸敬先生,
藤原浩先生, 橋口和生先生, 講演を快く引き受けてくだ
りいただいた吉村泰典先生, 学会事務局の増野招代様に心より御
礼申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省. 医師・歯科医師・薬剤師調査の概況. 2009, p. 9-12
 - 2) 日本産科婦人科学会. 日本産科婦人科学会員の卒業後2年から16年における就労状況について. 2007, p. 1-47
 - 3) 日本産科婦人科学会. 日本産科婦人科学会会員年齢別・性別分布. 2009
-